

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)  
 大学院生研究  
 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学 専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科 日本文学専攻博士課程 後期2年	乾 英治郎 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学院教授	藤井 淑禎 印	
自然・人文 ・社会の別	自然 ・ 人文 ・ 社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題名	永井龍男研究 昭和前期・後期の文学状況及び雑誌文化との関わりから		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	立教大学大学院 文学研究科 日本文学専攻 博士課程後期2年	乾 英治郎	
研究期間	2012年度		
研究経費	200 千円(実績額又は執行額)		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は永井龍男という編集者兼作家を視座にして、昭和の前期(戦前)・後期(戦後)における文学状況及び出版文化状況について調査・分析・考察を行うものである。「短篇小説の名手」として知られた永井は、戦前は文藝春秋社の名編集者でもあった。芥川・直木両賞の創設から運営にまで深く関わり、両賞の育ての親と呼ばれた。また大衆小説誌であった『オール読物』の執筆陣に純文学の作家を投入することで中間小説の土壌形成に貢献した。戦後はGHQの公職追放を体験するが、文壇に再デビューを果たすと、短篇小説と並行して大衆向けの長編娯楽小説にも手を染め、それらが次々と映画化される。芥川賞銓衡委員に復帰してするも昭和の終焉=平成の始まりと共に永眠している。このように、永井は昭和文壇史を考える上で重要な位置を占める作家であるにも関わらず、研究が殆ど行われていない。こうした現状に一石を投じ、永井を文学史の中に正当に位置付けることが、研究の目的である。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 昭和文学 ] [ 中間小説 ] [ 雑誌メディア ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)**1, 研究方法**

本年度は、(一)永井龍男の文藝春秋社社員時代の事績について、当時の雑誌の調査(二)『永井龍男全集』未収録の長編小説・短篇小説・随筆・座談会などを中心とした資料収集・分析の二点について重点的に行った。(二)に関しては、未だ入手困難な資料(少部数の同人誌・地方新聞掲載の文章など)も多いが、永井の全仕事の1/3程度の収録に留まるとされる現行全集の遺漏をある程度補い、永井文学の全体像を概ね把握できる段階にまで到達することが出来た。

**2, 研究報告****(1) 永井龍男の芥川・直木賞創設への関与についての考察**

永井は、昭和二(一九二七)年に横光利一・管忠雄の推挽で文藝春秋社に入社し、様々な文芸誌の編集者を歴任、『オール読物』の初代編集長を務めた。また、芥川・直木賞に創設から関わり、常任理事として、候補作収集から銓衡委員の日取りや会場の設定・景品準備などの事務一切を取り仕切ったことで、両賞の「育ての親」と呼ばれている。宇野浩二が「回想の芥川」(『別冊文藝春秋』昭27・8)の中で「誠に、芥川賞の第一回から第二十回までの銓衡が、まがりなりにも一回も休まないで、つづいたのは、誰でもない、唯一人、永井龍男のお蔭である」と謝辞を述べているほか、永井自身にも両賞に関するエピソードを綴った『回想の芥川・直木賞』という著書がある。しかし、一介の編集部員に過ぎなかった永井が何故に両賞に関与することになったのか、回想録だけからは判りにくい。そこで、芥川・直木賞の成り立ちに遡って調査した。

菊池寛が両賞設立の構想を公にしたのは、直木三十五の追悼号にあたる『文藝春秋』昭和九(一九三四)年四月号の「話の屑籠」においてである。そして昭和一〇(一九三五)年新月号(刊行は前年末)に「芥川・直木賞宣言」が発表されるのだが、永井が『回想の芥川・直木賞』で回顧するところによれば、両賞制定の準備が開始されたのは昭和九年一〇月始めのことであったという。菊池がこのタイミングで両賞創設の実現に動いたのは、梅田康夫「芥川賞裏話」(『創』昭52・3→『芥川賞の研究』日本ジャーナリスト専門学院出版部、昭54・8)によれば、文藝春秋社の社員であった川崎竹一(後、フランス文学者)が『文藝通信』に寄稿した文章が発端であったとされる。川崎がゴンクール賞やノーベル賞など海外の文学賞を紹介したついでに、日本でも権威のある文学賞を設立するべきだと書いたところ、これを読んだ菊池は、川崎に文藝春秋社内ですぐに準備委員会および選考委員会を作るよう要請したのだというのである。『文藝通信』というのは、文藝春秋社が発行していた『新文藝思想講座』のPR誌として昭和八(一九三三)年一〇月に創刊された雑誌であり、永井が編集長を務めていた。川崎が書いた海外の文学賞の紹介文とは、昭和一〇(一九三五)年二月号に掲載された無署名「世界文学賞物語」であると思われるが、これは「芥川・直木賞宣言」発表後に掲載されたものである。つまり、菊池に影響を与えた記事は別にある。それは恐らく、前年一一月号の「文藝鉄箒」欄に掲載された竹立生「新人擁護の機関を求む」であろう。内容は、〈文芸復興の実をあげるための新人養護の機関が必要で、本来は文芸院を持つことが望ましいが、その設立に尽力していた直木三十五が亡くなったので、せめて権威のある文学賞を創設することでその代わりにすべきである〉との提言である。「竹」立生は川崎「竹」一の変名と思しい。当該号が一〇月に刊行されていたことを考えれば、同月に菊池が芥川・直木両賞の創設準備を開始したという永井の発言とも符合する。川崎の文章が載った雑誌の編集長としての責任上、永井は両賞に創設から関与することになったと思われる。

尚、芥川・直木賞設立に竹立生(川崎竹一と推定)の「新人擁護の機関を求む」が果たした役割については、最近刊行された川口則弘『芥川賞物語』(2013.1刊行)にも言及はない(ただし、川口氏が運営するサイト「直木賞のすべて」では、前述の「芥川賞裏話」で言及された川崎の文章が「世界文学賞物語」であることまでは特定されている)。

永井の編集者時代を追求することで、昭和文壇史的一幕が見えてくるという好例である。

## (2) 『オール読物』誌面改革に関する調査

現在も続く『オール読物』は、当初は『文藝春秋』の不定期増刊号であったが、好評を得て『文藝春秋 オール読物号』の名で月刊化した。永井は昭和六(一九三一)年四月に同誌の編集者となり、翌年六月に編集長となる。同誌は昭和八(一九三三)年に誌名を『オール読物』に変えて再創刊されたので、永井はその初代編集長ということになる。直木賞受賞作の発表媒体ともなった雑誌であるが、創刊当時から業績不振に悩み、昭和一一(一九三六)年に永井編集長は誌面改革を実行、当初の所謂〈大衆小説〉系統の作家陣による時代小説を中心の編成に加え、純文学作家を投入、時代小説だけではなく現代小説を増やした。これが「中間小説」形成の土壌になったとされる。また、連載小説を廃して読切主義を徹底した。こうした一連の誌面改革については、永井自身が「小説オール読物」(『オール読物』昭 27・4 \*全集未収録)の中でも言及しており、恐らくこれを参照する形で大村彦次郎『文壇栄華物語』や wikipedia の『オール読物』の項目に同様の記述がなされている。ただし、「小説オール読物」は記憶に基づくために事実の前後関係に曖昧な箇所があり、また改革前後の紙面構成や作家編成についての具体的な記述がない。掲載小説に関しては『大衆文学大系』別巻所収の総目次によっても確認できるが、永井の編集意図は挿絵やレイアウトにまで及んだとされるので、実検の必要があった。国会図書館には実物・マイクロとも戦後刊行分の資料しかないため、日本近代文学館所蔵のマイクロ版を視聴した。結果、創刊当初の日本画風の表紙からモダンな表紙への転換、巻頭グラビア記事の強化等の様々な誌面改革の跡を確認することができた。

とはいえ、同誌が果たした「中間小説」形成の過程を、より精密には跡付けるためには、今後の更なる調査に基づく分析・考察が必要である。

## (3) 永井龍男の長編小説の調査

永井龍男は〈短篇小説の名手〉とされるが、長編小説も数多く書いており、その幾つかは映画化・TVドラマ化されている。しかし、単行本化された長編小説の半数近くは全集未収録となっている。永井文学研究のためには長編小説の把握が必須であるため、本年は単行書の収集に努めた。また、映像化された永井作品の殆どは視聴困難であるが、最初の映像化作品である『ああこの一球』(一九五〇)はDVD『昭和こどもキネマ』に収録、『街燈』(一九五七)はシナリオが単行本化されているので、いずれも原作との比較が可能であった。

永井の長編小説全体の傾向としては、都会に住む男女の恋愛模様を軸にしたメロドラマ風のものが多く、特色としては、台詞回しが巧みであること・心理描写が繊細であること・読者の興味を次回に継続させるようなミステリアスな部分を所々に配置してあることなどの、連載小説を成功させるのに十分な手腕があったことは確認できた。しかし、結末に到っても伏線が回収されない・開始時点での主要人物が途中で退場してしまうなど、構成面にやや弱さを感じられる作品も多かった。永井の本領はやはり短篇にあることが再確認された格好であるが、複数の新聞・雑誌に長編小説を同時連載する流行作家であったのも事実であり、当時の新聞小説ないし通俗小説の水準に照らして、永井の長編小説作家としての力量を再計測する必要性を感じている。

## 3. まとめ

本年度は、〈短篇小説家〉ではない永井龍男像を掘り起こすことに重点を置き、その準備としての調査及び資料収集については一定の成果を得た。これらを整理・体系化し、分析・考察を加え、永井の業績を日本近代文壇史や出版文化史に位置づけていくことが、今後の研究課題である。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

乾英治郎「永井龍男「青電車」論—<知らない>男と<わからない>女」『昭和文学研究』65集、2012年9月、pp.71-83